

今日学ばせていただく所を、ご一緒に拝読をさせていただきたいと思ひます。テキストの七頁、「本願名号正定業」。よろしいでしょうか、どうぞ声をお出してください。

本願名号正定業 至心信樂願為因

この南無阿彌陀仏の名号こそ真実の言葉となって  
人が生きて往く道を正しく定めるはたらきをします。  
み名に込められた、真実に目覚ませようとお心が、  
私たちのいのちの根源にはたらきかけ、呼び覚ますのです。

成等覚證大涅槃 必至滅度願成就

だれもが平等ないのちの尊さに目覚めて、  
真のさとりの世界に帰することができるのは、  
必ずさとりに至らせよう、という  
阿彌陀の願ひが成就しているからです。

どうもありがとうございました。先程ご一緒に正信偈、同朋奉讃のお勤めをさせていただきました。いつものことではありますが、皆様方と一緒に勤めをさせていただきますことは、大変感銘の深いことでもあります。親鸞聖人ご自身が、九十年のご一生をかけて、本当に大事な浄土真宗の教えの要の中の要を「正信念仏偈」という歌に歌いあげられておるのであります。それを私たちが今、こうして皆様方と一緒に勤めできるということはまことに有難い、感銘の深いことでもあります。

今日は大変冷えておりまして、天候も不順であります。何かこう地球が一体どうなっていくのだろうかという、そういう心配すら感じさせられる昨今であります。

ご承知のように昨日は、東日本大震災の五年目ということでもあります。たくさんの方々が犠牲になられまして、行方不明の方々もたくさんおられます。苦悩や痛みや悲しみは、いよいよ深いのだということを知られるのであります。

天災だけではなく、福島原発ということもあります。放射能漏れがあって、未だに営々として働いて築いてきた自分たちの土地に帰れないという方々がたくさんいらっしゃるのです。そういうことを思いましても、人間が文明の進展ということで営々として築き上げてきたものは、一体何であったのかということをも痛切に考えさせられます。

私はやはり、人類自身がそういうことを深く本当に痛みを伴って、反省しなければならない。反省というよりは懺悔しなければならない。そういうことではないかと思ひます。一部の人だから犠牲になっても止むを得ないということでは絶対に済ますことのできない問題であろうと思ひます。

そしてご承知のように、一九四五年三月十日は、東京大空襲でございました。私は敗戦の時は小学校の四年生で、四国の香川県さぬきにいたのであります。その当時の東京大空襲のことは、ニュースとして報じられたと思ひます。B-29が三四四機ですか、襲ってきまして。そして死者が約十万人と。消失戸数が二十七万戸と報じられていました。このあたりも恐らく焼け野原になったのですよね。今は立派なご本堂がこうして建設され、ご住職様、ご家族の方を初め、ご門徒の皆様が受け継がれ、灰燼（かいじん）に帰したというそういうことを私たちが忘れることはできません。

これはもう明らかに人災であって、人と人とがいがみ合うと。己の考え方、己の感じ方、己良し

とし、己を正しとして人様のことに聞く耳を持たんということはどれ程恐ろしいことかわからないということを知らされるのであります。歴史の事実学ぶということが大事でありますけれども、人間はなかなか喉元を過ぎれば熱さを忘れるということがあって、なかなか学べない。学ばないということも悲しい人間の現実であろうと思います。

天災ということで、蓮如上人の言葉で思い起こされることがございます。「御文」の四帖目の九通。疫癘（えきれい）の御文という。

### ◎疫癘の御文◎

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、いまの時分にあたりて死去するときは、さもありぬべきようにみなひとおもえり。これまことに道理ぞかし。このゆえに、阿弥陀如来のおおせられけるようは、「末代の凡夫、罪業のわれらたらんもの、つみはいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくうべし」とおおせられたり。かかる時はいよいよ阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、極楽に往生すべしとおもいとりて、一向一心に弥陀をとるときことと、うたがうところつゆちりほどももつまじきことなり。かくのごとくころえのうえには、ねてもさめても、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏ともうすは、かようにやすくたすけます、御ありがたき、御うれしさを、もうす御礼のころなり。これをすなわち仏恩報謝の念仏とはもうすなり。あなかしこ、あなかしこ。

今は医学が大分進んでまいりまして、伝染病に対する対策ということも相当進んできたのであります。私どもの子どもの時に、太平洋戦争の前、太平洋戦争中であっても、未だに印象に残っておりますのは、赤痢とかチフスというのが流行ったのです。お母さんと思しき人が真っ青な顔をして走って、子どもをなんとかしよう。そういうような情景が焼き付いております。それこそ親鸞聖人の時代は、今とは問題にならない程、たくさん病気や飢饉や災害があったわけでありまして、天災、戦争がありまして、人間の命が非常に脆いということがあつたわけですね。

その疫癘の御文は、こういう言葉で始まっています。「当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す」。この頃は疫病、流行り病が流行ってですね、たくさんの方々が亡くなっていかれる。「これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生まれはじめしよりしてさだまれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり」。たくさんの方々が疫癘によって亡くなっておると。御文は八代目の蓮如上人が書かれたものですがけれども。蓮如上人自身が非常に悲しいという、悼むというそういう気持ちは深くありながら、教えの言葉をいただかれた。疫癘によって死ぬのではないと、疫癘という病気が原因で死ぬのではないと。この死ぬということは、生まれはじめしよりさだまれる定業なり。生まれた時から、もう死ぬということは決まっておるのだ、決定しておるのだと。そんなに驚くことではないのだと。こう言われておるわけですね。

この蓮如上人のお言葉はちょうど今の東日本大震災ならば、その状況と重なるような言葉ですね。たくさんの方々が亡くなられ、行方不明の方々が未だにいらっしゃる。まことに悲しい悲惨な現実であります。それに出遭った多くの方が生涯、忘れることのできないような痛みであろうと思います。その悲しい現実、実はよくよく受け止めていくなれば、生まれた時に人間は死ぬということが決定しているのだと。決定しているのであるけれども、そのことを忘れてしまう。そういう悲しみがあるわけですね。

これは金子大栄先生がよく書かれた言葉です。「生は偶然、死は必然」。生まれるということとはた

またま人間に、私として生まれたのである。それから必ず死ぬということは生まれた時にもう既に決まっておるのであると。この疫癘の御文をいただきますと、そこからはっきりしてくるのは、死の縁、無量ということですね。これは「朝(あした)には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり」と。

### ◎白骨の御文◎

それ、人間の浮生なる相をつらつら観ずるに、おおよそはかなきものは、この世の始中終、まぼろしのごとくなる一期なり。されば、いまだ万歳の人身をうけたりという事をきかず。一生すぎやすし。いまにいたりてたれか百年の形体をたもつべきや。我やさき、人やさき、きょうともしらず、あすともしらず、おくれさきだつ人は、もともせずく、すえの露よりもしげしといえり。されば朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり。すでに無常の風きたりぬれば、すなわちふたつのまなこたちまちにとじ、ひとつのいきながくたえぬれば、紅顔むなしく変じて、桃李のよそおいをうしないぬるときは、六親眷属あつまりてなげきかなしめども、更にその甲斐あるべからず。さてしもあるべき事ならねばとて、野外におくりて夜半のけぶりとなしはてぬれば、ただ白骨のみぞのこれり。あわれというも中々おろかなり。されば、人間のはかなき事は、老少不定のさかいなれば、たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて、阿弥陀仏をふかくたのみまいらせて、念仏もうすべきものなり。あなかしこ、あなかしこ。

紅顔というのは血色のいい顔をしているけれども、夕べには白骨となれる身であると。蓮如上人は白骨の御文の中でね、これを言われております。「朝には紅顔ありて夕べには白骨となれる身なり」。こういう言葉をいただきますと、私たちの生きている一日一日が、どれ程尊い一日一日であるかわからない。一瞬一瞬が本当に尊い一瞬一瞬であるかわからないということを知られます。

私は総武線を使っておるのですが、若い時に見ていた隅田川の水位と、今の隅田川の水位とは大分違う感じがいたしました。今の方が、水位が高くなっている感じがいたします。これは東日本大震災のような地震が来るならば、首都圏はひとたまりもない。私も市川に住んでおりますが、ひとたまりもないなど。だからこれは他人事じゃない。やっぱり人間が生きておるといことはそういう人災があり、天災がある。そういう危機の中で生きておるのであるということが本当に大事なことであるということを教えられます。

私たちが「正信偈」を学ばせていただくということはそういう現代の厳しい状況の中で学ばせていただくものであるということをつくづくと教えられまして、「正信偈」の親鸞聖人のお言葉に触れて、私たちが現実に生きている生活の一日一日の尊い意味を呼び起こされていくという、そういうことがはっきりしていると思います。

先程ご一緒にお勤めさせていただくということもまた、教えに出遇った大きな感動の表現であります。それは個人だけではなく、御同朋御同行の交わり。そこには本願念仏の量り知れない歴史があるわけです。その歩みを受けて、そういう歩みの中に私たち一人ひとりが参加をさせていただいて、お勤めをさせていただき、聴聞をさせていただくのである。そういう意味があるかと思ひます。

「正信偈」は、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」から始まるのでありまして、これは南無阿弥陀仏の念仏から始まったということですね。南無阿弥陀仏はインドの言葉であります。それを日本語に直せば、「帰命無量寿如来 南無不可思議光」ということでもあります。念仏から始まるということは、私たちの人生はまず何をさておいても南無阿弥陀仏の念仏に遇い、念仏に聞き、私た

ちの生活全体が実は不可思議光、無量寿如来のはたらきの中にあるということをはっきりいっていくことができる。忘れても忘れても。忘れないならそれは素晴らしいですが、人間には悲しいかな、忘れるということがございます。忘れても忘れても立ち帰る。そういうはたらきがあり、そういう世界が開かれておるのだということを知られるのであります。

「正信偈」はまず念仏から始まって、そして「法蔵菩薩因位時」からは親鸞聖人が真実の教えとしていただかれた『大無量寿経』の教えの要を歌にして歌い続けてこられました。今日読みました所は、『大無量寿経』の依経段。「正信偈」は「帰命無量寿如来 南無不可思議光」から始まって、「法蔵菩薩因位時」から「必至滅度願成就」。ここまでが依経段。「印度西天之論家」から依釈段。インド・中国・日本の七高僧のお一人おひとりが歌われ、そして最後に「道俗時衆共同心 唯可信斯高僧説」。この高僧の説を信ずべしと結ばれているわけです。

この全体の構成はそうなおるわけですから。この中心の依経段の結びに『大無量寿経』の教え、浄土真宗の教えの要は「本願名号正定業 至心信楽願為因 成等覚證大涅槃 必至滅度願成就」であると。本願の名号は正定の業なり。これは真実の行、南無阿弥陀仏の念仏こそが浄土に生まれるという、正しく定まるはたらきであると。

「至心信楽願為因」。真実の信心こそが浄土に生まれる、正しく種、原因であると。南無阿弥陀仏の念仏の行、大行ということが根本であり、その内容において真実信心ということが発起されて、この大涅槃の覚りに至る因となる。

そして「成等覚證大涅槃 必至滅度願成就」。これは仏陀釈尊と等しい覚りを得て大涅槃。これはもうものすごくスケールの大きな覚りの世界。目覚めの世界ですね。光明無量、寿命無量の世界なのです。

『教行信証』では真仏土巻ということがある。真実の仏、阿弥陀仏とその浄土の世界。大涅槃の世界。人間のありとあらゆる問題を根源的に摂め取り、意味を見出さしめるという。どれ程罪悪煩惱があろうともそれが覚りの妨げにはならない。何故ならば、大涅槃から表れた、本願念仏、本願名号において呼び覚まされていくからであると。そういう意味があります。

だから親鸞聖人に会うことに教えられる目覚めの世界は、決して個人的な目覚めや覚りというスケールの小さな狭い浅いものではありません。十方衆生、あらゆる人間存在の問題を根底から愛おし知らしめして、そこに本当に大事な意味、命をいただいて生きておるという意味を見出さしめるという。そういう大いなるはたらき。そういうことがこの四句に歌われていると。

今日はですね、その四句を一緒に読んでいただいたのでありますが、特に「本願名号正定業」ということを中心に学ばせていただきたいと思います。本願の名号は正定の業なり。本願の名号というのはお念仏ですね。南無阿弥陀仏の念仏である。その念仏が人間存在を正しく目覚ましめるはたらきであるということをお教えてくださっているのであります。

これは親鸞聖人ご自身が『尊号真像銘文』というお聖教の中で注釈を書かれております。ご自分の作られた「正信偈」を丁寧に注釈されているのです。親鸞聖人ご自身が書かれたものですが、それは大いなる伝統、はたらきをいただいて感得したものであると。私がいただいて表したものであるけれども、私自身が何よりもまず、敬っていただくべきものであると。わしが表したものだから大したものだろうという気持ちは全くないのですよ。私まで本願真実のおみのりが伝統としてきて、表すことができた。その根本の著作が『教行信証』ですね。その中の念仏を親鸞聖人は、人々と共に歌いたい、いただきたいというそういう願いが彷彿とね、漲っていると思います。『真宗聖典』の五三〇頁に、

和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文

和朝というのは日本の国です。愚禿釈親鸞というのは親鸞聖人ご自身が『教行信証』を表される時の名のりですね。愚禿というのは非僧非俗ということを表したのであります。「僧にあらざ俗にあらざ」っていうのはただ単に俗人でもない、坊さんでもない、そういう意味ではなくて、あらゆる人間の逃れることのできない根本の問題を抱えて生きるという意味がその根底に流れていると思います。釈というのは仏弟子の名前です。親鸞という名前も天親、曇鸞が思われるわけでありませぬ。如来の本願力回向ということ身をいただいた。

私たちが「正信偈」をいただくときにね、親鸞聖人ご自身が和朝愚禿釈の親鸞が『正信偈』の文をと、こう言われておるわけですから意義が深いですね。そういう「正信偈」をいただくのであります。その「正信偈」の初めに、「本願名号正定業」からですね、「即横超截五悪趣」の所まで注釈をしておられるのです。

「本願名号正定業」というのは、選択本願の行というなり。

選択本願ということは法蔵が本願を起こされた。選択本願の行というのは何か。法蔵となって、あらゆる人々が本当に目覚め、救われていく道として選びに選び抜かれた本願の行であると。本願が、南無阿弥陀仏の名号、念仏となって表現されたのであるという意味があるわけですね。これは大変大事な意味があるのです。

私たちは人生を生きていく上で、実は行に迷っているのですよ。何をしたら本当に幸せになるか。何をしたら本当に人生を空しくないということので終わることができるかと。金儲けに命懸けになる人は金儲けが出来なければ生まれた意味がないということじゃないですか。けどいくら金儲けに命懸けになっても出来る人も出来ない人もあるわけでしょう。仕事にすらありつけないということもあるでしょう。どうなりますか。金儲けに命を懸けるならば。ごく一部の人しか、いわゆる常識的な意味で生きる喜びを見出せないことになります。人間に生まれたということは一人ひとりに大事な意味、生きがい、喜びがある。なければならない。これが本願の眼なのです。人間の眼はそうじゃありません。

よく言われる東北出身の『銀河鉄道』を書かれた宮沢賢治は「すべての人々が幸せにならないならば、私は幸せにならない」。これは余程の人でないかね、言えない言葉ですよ。本願ということ十方の衆生が、本当に幸せになるという道を選び抜かれて南無阿弥陀仏の名号、念仏を表現してくださいました。念仏は誰でもいつでもどこでも申すことができるのです。これは大変なことですよ。例えば目が見えなくなっても、歩けなくなっても、色んな悲しい出来事が起こってきても、南無阿弥陀仏の念仏を申すことができる。念仏を申す身になると、量り知れない命のはたらきに支えられて、念ぜられてあると。支えられてあるというそういう自分自身の人生を発見することができる。

次の「至心信樂願為因」ということは、

「至心信樂願為因」というのは、弥陀如来回向の眞実信心なり。

というふうに注釈されております。この信心が無上なる覚りの因であるということ親鸞聖人ご自身が『尊号眞像銘文』というお聖教の中で注釈をされております。この親鸞聖人の教えを深く学ばれました存覚という方は、本願名号の一句は第十八願の心なり。存覚は三代目の覚如のお子さんです。「本願名号正定業」というのは第十七願。「諸仏称名の願」と申しまして、十方世界の無量の仏様方に、我が名、阿弥陀の名前を称えられるようになろうと。もし称えられなければ仏にはならな

いという、そういう願ですね。

◎第十七願 諸仏称名の願◎

たとい我、仏を得んに、十方世界の無量の諸仏、ことごとく咨嗟して、我が名を称せずんば、正覚を取らじ。

これは『教行信証』の真実行、南無阿弥陀仏を表す真実行の要となる願。これが第十七願です。これは非常に意味が深いわけです。自分一人が勝手に絶対だと言っておるのではないのですよ。それははっきりしているのです。例えばね、オウム真理教を出すと、教祖が絶対だと。わしのことを信ぜよということになるでしょ。これも例えば政治の問題にしてもね、ドイツのヒトラーなんかは自分が絶対だということで強制的にたくさんの人を殺していったと。日本だって大東亜戦争ということで日本が神国であろうと。これを世界中に広げなきゃならないというようなことで圧迫していくという。圧迫されたということもあるけれども、そういう自分を絶対者として立てる。絶対化する。

この絶対化ということが曲者なのですよね。化というのは作意があるのです。計らいがあるわけですよ。本当の自然はそういう計らいが必要ない。自ずと尊いですねと、素晴らしいですねとって讃嘆される。阿弥陀の真実はそこに表れる時に南無阿弥陀仏の念仏を十方世界の量り知れない仏様方が讃嘆してやまない。そういうはたらきが諸仏称名の念仏のいわれであると。本願名号というのは、そういう意味があるわけですね。

今、久し振りに思い出しましたが、ある方の嫁ぎ先のおばあちゃんが念仏者で、田んぼへ行くときも念仏と共に田んぼへ行って。「有難い、有難い」ということを言っておられた。嫁がれた時にその方は知性的な方なものですから、「なんとまあ迷信深いのだろう」と初め思っておられたようであります。生活を本当にいただくということを徹底しておられたようであります。その方の息子さんが優秀な方で、東大へ行かれたということがおありになった。その方が子どもに、「あんたは我が家の中では誰を尊敬するかね」って聞いたらしいのです。密かに自分のことが言われるのではないかと期待しておられたようでありますが、「おばあちゃん」と。

これは今もね、その先生が話した時の状況が浮かぶのですが。映画で「親鸞」が映画化された。萬屋錦之介さんが出た映画。その親鸞さんが映画で出てくるとね、念仏を唱えているという。普通の常識では考えられないくらいのそれ程ね、親鸞様ということに敬っておられたようであります。その息子さんは我が家で尊敬できる人は「おばあちゃん」と言われたらしいのですよ。彼女はね、参ったのと嬉しかったのとね。

おばあちゃんは別に『教行信証』を読んでおられるわけじゃないのですよ。一生懸命に仕事をされながら念仏を生きられる。むしろ生活が念仏の中にあるという。だからそういうこの生活がお母さんのはたらきを超えて、お孫さんに感銘を与えるという。そこにこの自然のはたらきがあるわけです。

「本願名号正定業」ということも本願の名号が念仏申す者の上に自然に、大いなる命の尊さということと呼び覚ましてくださる。そういうことを表していると思います。先程の存覚の注釈の中では、至心信楽の一句は十八願の心なりと。これは存覚の注をまたなくてもそういうことは自ずと領かれるのでありますけれども、そういう本願の名号に遇うということがどれ程大きな意味があるかわからない。選択本願の行というところには、本願名号が選んで、選んで、選び抜かれて、南無阿弥陀仏の念仏を表現してくださったと。私はそのことにね、非常に大事な意味があると思うのです。

やっぱり人間存在はですね、『歎異抄』の第一章の言葉をいただきますと、罪惡深重煩惱熾盛。

煩惱っていうのは煩い悩みですね。それから熾盛っていうのは燃え盛っていると。なかなか枯れることがないと。歳を取ったら枯れるだろうと言いますが、どうですか。歳を取れば歳を取ったで、また煩惱が燃え盛るといふね、そういう現実でございます。

私は命のある限り、煩惱はなくなると。煩惱がなくなると、それが煩惱であるということをお教えてくださる、知らされる。そのことが個人的な悲しみを越えて、如来に悲しまれておるのであると気付く時に、煩惱が意味を持つてくるという。歳を取ってくると頑固な面がなくなるどころかね、なくなるといふものだなあということに気付く。そのことにおいて、如来の悲しみに触れ、それが和らげられる。和らげられるということとは、生きておるといふことの深い意味をね、教えらる。

やっぱり人間存在は命のある限り、呼吸のある限り、現在進行形であると。念仏を申し、聞法させていただいて、我が身に出遇い、人々に出遇い、大いなる命の歩みに出遇っていく。本願念仏の伝統に出遇っていく、そういう現在進行形。そこにかかすことのできないのは、罪惡深重という。

生きておるといふことは、例えば殺生せずしては生きられないわけですよ。殺生(せつしょう)、偷盜(ちゅうとう)、邪淫(じゃいん)、悪口(あくぐち)、両舌(りょうぜつ)、妄語(もうご)、綺語(きご)という十惡というのがありますけど、命あるものを殺して生きておるわけですよ。偷盜っていうのは盗むわけですね、人様のものを利用するのが得意です。盗むということもないわけではありません。邪淫というのとは邪(よこし)まな男女関係ですね。それはいわゆる生々しいことだけじゃなくして、邪まな思いということとは、中々深いものであります。悪口、二枚舌、嘘、おべんちゃら。そういったものがいっぱいある。

罪惡深重っていうことは特別な人のことを言っておるのではなくて、あらゆる人間存在。ずばり言えば私自身の中にある、罪惡の深さなのです。罪惡の深さということが、それを知らされるならば、何とまあ深い、重い、大事な命をいただいているのであるかと。だから罪惡深重の自覚、痛み、悲しみということと、命の尊重、尊嚴。それは一つのものでありますね。だから私は罪惡なんか犯していないと言える人は、私は一人もいないと。まあ親鸞様の教えに遇うとね、そういうことを教えられつつあります。やっぱり自分のいただいた一人の命の尊嚴ということに気が付くならば、どれ程大きな命のお世話になり、恩恵を受けて生きてきたかわからないということに気が付くわけですよ。

個人的なことを申し上げて恐縮ですが、私は四つの時に母親が三十九歳で亡くなりました。その時に臨月の赤ちゃんがいたと聞いております。母親は心臓が弱かったということもありまして、そのことを思うとね、お子さんを産むということは命懸けの仕事なのだ。今は医学が進歩して無痛分娩なんてことも言われますけれども、命懸けであるということには変わりないと思っております。自分の意識では親を傷付けたっていう思いはないかもしれないけれども、事實は量り知れない命の痛み、悲しみ、恩恵さえというものを受けて、今現に私一人がここにいるということがあつたわけですよ。現代の言葉で言うならば、人間は煮ても焼いても食えないような、底知れない問題を抱えて生きておる存在でありますということでは言えるのではないのでしょうか。命をいただけて生きておるといふ事實をね。眞實を感じるということにおいて、事實が事實として受け止められる。人間は色んな人間関係があつても、決定的には一人ひとり生きて死んでいく存在であると。

これは積尊が『大無量壽經』の中で言われておりますように、独生独死独去独来という。

人、世間の愛欲の中にありて、独り生じ独り死し独り去り独り来りて、行に当り苦樂の地に至り趣く。身、自らこれを当(う)くるに、有(たれ)も代わる者なし。  
(眞宗聖典 六〇頁)

誰も代わってもらえない、徹底的に一人の存在である。これは事実ですね、しかし一人が量り知れない命のはたらきに支えられ、生かされて生きておるといふことを感ずる時に、阿弥陀の本願の真実の中に、南無阿弥陀仏の念仏の中に生かされているというそういう真実のはたらきを感じれば、この事実が尊い事実として受け止められていくといふことです。一人の寂しさといふことを本当に感ずる人は、如来の本願に遇うとその一人も一人にしておかないと。如来がこの身となって、共に生きてくださるといふことに気付くならば、一人といふ存在がいかに意味の深い存在であるかといふことに気が付く。

私自身にとってもこれからの問題ではありますが、今は連れ合いが元気でいてくれますけれども、それこそ「我やさき、人やさき、きょうともしらず、あすともしらず」。老いの一人といふことを味わうかもしれない。それからその時やはりこの本願の念仏をいただいて生きていける。そういう聴聞の聞法の念仏に呼びかけられておる人生が開かれているのであるなあといふことを教えられつつあるわけです。この本願の名号といふことが、本願自身が名号といふところには私たちに名のり出て、呼びかけて、私たちが称えることのできる念仏にまでなってね、表現してくださっている。そういう意味があります。その名号を称えて、真実に触れる。

念仏について曾我量深先生は「本願の名号は生ける言葉の仏身である」と言われた。念仏は本願の念仏。本願といふことは十方衆生を助けずんばやまないといふ、つぶさには私自身の上にも名のり出て目覚ませなければやまないといふ名号といふ。生ける言葉の生きている言葉の仏様であると、御身であると。これも大変迫力のあるお言葉で私も曾我先生のご高齢の中でお聞きして大変印象に残っています。未だに忘れることができない。そこに生きている仏様、阿弥陀様に遇うと。今、遇うと。私の中ではたらいっているといふことを感ずると、そういう意味が本願の名号ですね。

これも曾我先生の言葉ですが、「仏様はどこにおいでになりますか」といふことを出しまして、「南無阿弥陀仏と念仏申すところにおいでになる」。「仏様はどういうお方ですか」、「我は南無阿弥陀仏であると名のりおられる方である」といふ意味で非常にこう日常的な言葉でね、表現してください。我を南無阿弥陀仏と念じ、称える人の前に、直前に仏様はおいでになります。これは苦悩の深い、煩惱衆生罪悪深重の身であればこそ、そういう自覚を与えられるといふことと同時に、この身に呼びかけられる。そういうはたらきが本願の名号であると。

本願力にあいぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

(高僧和讃 真宗聖典

四九〇頁)

この人生をむなしく終わることのないと。南無阿弥陀仏の念仏のはたらきがみちみちて、煩惱一杯の人生が全面的に摂め取られて満たされて生きていくことができる。そういう大いなる本願念仏の仏道が開かれているといふことを讃えられていると思います。これは一宗一派の問題ではなくてですね、あらゆる人間の根源的な根本の問題として明らかにされている。非常にダイナミックなスケールの大きい、そういう本願の思想といふことが讃えられていると思います。時間が大分経ちましたので、話の方はこれで終わらせていただきます。今日は一句、「本願名号正定業」といふ一句について、大変意義の深い大事な所です。後の質問の時間、座談の時間も大事でありますので、今日はこれで終わらせていただきたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。